令和４年度　公立諏訪東京理科大学学位記授与式　告辞

本日、ここに学位を授与される皆様、ご家族の皆様、おめでとうございます。公立諏訪東京理科大学教職員を代表して、心よりお祝いを申し上げます。また、若者の門出を祝うためにご臨席を賜りましたご来賓の皆様に厚く御礼申し上げます。

さて、皆さん次の言葉を聞いたことがあるのではないでしょうか？
「我々はどこから来たのか 我々は何者か 我々はどこへ行くのか。」
これは、フランスの画家、ポール・ゴーギャンがタヒチ島で描いた傑作に付けられた絵画の名前です。
哲学的なニオイのする、この絵画の名前は大変有名です。
いろいろなところで引用されています。
前半、中盤の問いかけ「我々はどこから来たのか 我々は何者か」については、科学の進歩もあり大分わかってきました。

最初の問い、我々はどこから来たのか？
2006 年に実用化された次世代シーケンサーなどのおかげで、ゲノム（遺伝子情報）解析の技術が飛躍的に進歩しました。そのため、我々、ホモ・サピエンスがいつ、どこで誕生したのか等についての知見が得られるようになりました。

定説では、ホモ・サピエンスはアフリカで誕生したとされています。最も古いホモ・サピエンスの化石が、アフリカのほぼ 30 万年前の地層で発見され、それ以降、６ 万年から 5 万年前まではアフリカでのみ見つかっているからです。また、ネアンデルタール人やデニソワ人の共通祖先から分岐したのが 60 万年ほど前ということもわかってきました。
余談ですが、種の定義を「自由に交配し、生殖能力のある子孫を残せる集団」と定義するなら、ホモ・サピエンスとネアンデルタール人、デニソワ人は自由に交配し子孫を残していることが知られていますので、同じ種となります。
ノーベル生理学・医学賞を受賞されたマックス・プランク進化人類学研究所のスバンテ・ペーボ教授は、次世代シーケンサーを使い、ネアンデルタール人のゲノム配列を決定し、ネアンデルタール人とホモ・サピエンスの遺伝子間に共通の部分があることを明らかにしました。
これは交配し子孫を残したことを示唆しています。
話を元に戻します。定説に従えば、我々はアフリカから来たことになります。ホモ・サピエンスに関する遺伝子研究によると、ホモ・サピエンスの総人口は、約 7 万～ 6 万年前の一時期、2000 人～ 1 万 5000 人まで減少し、絶滅の危機にあったと言われています。6 万年前頃というと、ホモ・サピエンスが出アフリカを行い、全世界に進出し始めた時期です

。
危機的な人口減少と出アフリカは何か関連があるのかもしれません。

　では次の問い、我々は何者か？
科学の進歩により、我々は、地球上の生物の一種で、共通の祖先から分かれて今に至っていることが判明しています。例えば、ヒト属（ホモ属）は約500万年前に、共通の祖先からチンパンジーと別れたといわれます。人とチンパンジーのゲノム（全遺伝情報）を比べてみると、約98.8％が同じです。極めて類似しています。現在、ヒト属の中で、唯一生き残っているのが、我々が属するホモ・サピエンスです。
従って、我々は、地球上の生物の一種、それ以上でも、それ以下でもないのだと思います。
別の見方をすれば、生物としての制約以外、何も制約がなく、我々が、地球上の生物であることを除いて、どのような存在であるか、我々は何者なのか、を決めるのは我々自身なのだと思います。

　最後の問い、我々はどこへ行くのか？
我々が向かっていく未来社会はどのような社会なのでしょうか？
皆さんのこれから向かう未来の社会はどのような社会なのでしょうか？

　約50年前にローマクラブは経済成長の限界を警告した「成長の限界」を出版しました。
ローマクラブは、当時、タイプライター会社、オリベッティの副会長であったアウレリオ・ペチェイ氏が「無限の成長を求めると、人口増加と食料・資源供給の乖離、環境汚染と自然破壊などが世界を揺るがし、人類社会に危機を招く」と世界に訴え、1968年に結成されました。そのローマクラブが、昨年９月に「万人の地球」というレポートを出版しました。
このレポートでは、Earth4Allという、システムダイナミックス手法を用いたシミュレータを作成し、どのような政策をおこなうと、社会がどのようになるかを計算により予測しました。
その結果は「人類の長期的な発展は、今後数十年の間に劇的な方向転換を遂げられるかどうかにかかっている」というものでした。
提案されている方向転換の例は、GDP（国内総生産）を第一に追い求める経済から、ウエルビーイング（幸福で肉体的、精神的、社会的すべてにおいて満たされた状態）を第一に追い求める経済への転換などです。
我々は今、気候変動、パンデミック、格差拡大、人口統計学上の大変動等、各種課題に直面しています。また、技術革新により社会が急激に変わりつつあります。

将来が見通しにくい時代だと思います。

　世界銀行の副総裁等を歴任し、現在イギリス・ロンドンの有名大学の学長である、ミノーシュ・シャフィク氏は、その著書「21 世紀の社会契約」のなかで、「集団的機構の働きをつかさどる規範やルール」を社会契約と定義し、現代について次のように述べています。
「今ふたたび新しいパラダイムが必要になっている。テクノロジーや人口統計上の大きな変化により、古くからの構造は変革を迫られている。気候変動危機や地球規模のパンデミック、そしてそれらが経済にいやおうなく与えた影響は、既存の社会契約がすでに機能不全に陥っていることを明白にした。」と。
現代は、新しいパラダイム、つまり、新しいものの見方の枠組みが必要だと主張しています。

　我々はどこへ行くのか？
奴隷解放宣言をした、米国第 16 代大統領、エイブラハム・リンカーンは、「未来を予測する最良の方法は、未来をつくることだ」と述べています。
そして、「人民の、人民による、人民のための政治」という新しいパラダイムを示し、そうした社会を目指しました。

皆さんが古いパラダイムに縛られる必然性はありません。
皆さんは、新しいパラダイムを創り、より良い社会を作る権利を有しているのです。
皆さんがより良い社会を創造し、その社会向かって進み、そこでご活躍されることを心より願っています。

本日はおめでとうございます。

令和 5 年 3 月 18 日
公立諏訪東京理科大学学長　小越澄雄